

「スコットランドのロータリアン」

国際ロータリー第2640地区IM1組

ガバナー補佐 玉置 泰作（那智勝浦ロータリークラブ）



橋本恵さんが京都で挙式されて郷里串本に帰って来られた。串本ロータリークラブから「元ロータリー財団国際親善奨学生・橋本 恵さんのご結婚のお祝い会 並びに彼女のイギリス留学時のホストムーアご夫妻の歓迎会のご案内」という長いタイトルの案内状を頂いたのは 昨年11月1日のことである。

串本ロータリークラブは、少人数ではあるけれども過去に12名も奨学生を海外に送り出した名門クラブである。親子二代に亘って奉仕活動をリードしてこられた矢倉甚兵衛さんの功績が大きい。

11月7日6時半から始まったお祝いの会場は、眼下に橋杭岩と大島を望む高台にあり、数ある大和ロイヤルホテルチェーンの中でも白眉の景観と、石橋社長ご自慢のホテルである。今回は遠くスコットランドから来られたバリームーアさんご夫妻をお迎えするのに相応しいホテルである。



橋本さんの母校串本高校の校長先生や恩師、紀南国際交流会の会長、串本ロータリーの会員、それに元会員も集まって心温まるパーティーが開かれた。

お祝いと激励のスピーチがあり、続いて、橋本さんのお礼のご挨拶で「留学前には予想もなかった素晴らしいホームステイを体験して、国際交流の重要性を痛感しました」聞きながら拍手が起こる程の、感激的なご挨拶で、つい胸の熱くなる思いがして、補佐の冥利に尽きると感じたものである。

そのあと私が、特に印象的であったのは、ムーアさんの話であった。ムーアさんは ヴェールオブ キャロン ロータリークラブのメンバーで会長を経験された方である。矢倉さん、は橋本さんの

結婚式にムーアさんを招待はしたけれど、多分日本に来てはくださらないだろうと考えられた様子であった、それが来られたということで望外のお喜びであったと推察する。

ムーアご夫妻と同じテーブルだったから、身近にムーアさんと接して落ち着いた雰囲気と、よき時代の日本人が持っていた、いわば古武士見たいに背筋が真っ直ぐで、信念をもった男の風貌に、好感を持った。お話は、スコットランドの民俗衣装からはじまった。先ず腰に巻いたキルトは、横に広げると、9mもあってタータンを織り上げた一枚の大きなウール地である。タータンは家柄や部族によって異なり家紋みたいなかんじである。ムーアさんは、重とおっしゃったのは、家紋のことも、重量もふくめてのことであろう。右足の靴下には、短剣が差し込んである。ゲール語で黒い剣という意味の「スキヤンドウ」は見せてくれたのは銀色であった。他家訪問の折りこの剣を見せて、再び右足に差し戻すが、「親しい家庭のときは、内懐に格納するという。空港の検査よくパス出来たなとおもった。上から下まで沢山の決まり有る伝統衣装を、余さず守り続けるスコットランドに人々を、尊敬すると同時に羨ましく思った。日本には古武士は、見あたらなくなったのが無念ある。

(RI第2640地区マンスリーレター・2007年5月号より)